

ある孤独死について

わらしべ会

丸山正雄

2019年9月27日（金）早朝、私の携帯電話に届いた声は旧知のFさんからだった。話を伺うと、現在岡山県だという。23日から故郷の防府市に娘さんと二人で墓参りに出かけ、その晩に体調を崩して救急で現地の病院に入院していたという。電話の要件は、枚方市内で一人暮らしをしているご子息が亡くなったので、遺体が安置されている交野警察へ遺体を引き取りに行ってもらいたいという依頼であった。Fさん自身は、山口の病院から退院し、奈良の病院へ転院しなければならない状況にあった。AM7時過ぎに交野警察到着後、刑事課のMさんからご子息の発見状況や事件の関連性がないと判断されたことから、検安（警察と遺体の状況を検視する契約を担っている医師の診断書のようなもの）待ちの状況であることの説明を受けた。一旦職場に行き、警察からの連絡を待つこととする。13時過ぎに交野警察署からの連絡（遺体引き取り及び遺留金品受領依頼）を受け、14時に交野警察署到着後、葬儀社に遺体の搬送と遺留品の引き取りを済ませ、15時半頃に葬儀社への遺体搬送を終えた。Fさんの要望を確認し、家族葬の意向を伝え、Fさんの到着を待った。Fさんは、奈良の病院への入院手続きを終え、16時前に葬儀社到着。娘さんは一旦自宅に戻り、Fさんと葬儀社との葬儀打合せを行う。17時過ぎに、検安書をTクリニックに取りに行く。19:00にFさんは奈良の病院へ。因みに、Fさんの奥様も同じ病院に入院中である。

Fさんのご子息Yさんは、枚方市内のFさん所有マンションで一人暮らしをしていた。小学3年生の時に脳腫瘍と診断され、京都大学付属病院にて化学治療を開始し、奇跡的な回復がみられたという。しかし、経年と共にてんかん発作や歩行能力の低下等がみられるようになっていった。20代半ばのときにわらしべ園を訪れ、自身が働いていた楽器店から電子ピアノ（中古品・・・下取りか？）の寄贈も仲介してくれた。Fさんと村井正直先生はわらしべ学園（1978年1月開設）発足間もないころからの付き合いの為、Fさんの自宅に度々訪れ、Yさんとも旧知であったという。

14時半から葬儀開始、といっても家族葬であるからFさんご夫妻と娘さん、私の4名である。無宗教で執り行われ、住職の読経もない。葬儀社スタッフの粛々とした進行で花を棺に入れ終了となる。親より先に逝った子を送る高齢家族の虚しさ・切なさが伝わる。ここで判明したことを記す。最後の別れの場面での親子の会話である。Fさんの長女Mさんは、弟のYさんに対して「あなたは幸運だったよ。遺体発見時刻は26日の16時頃でTクリニックの死亡推定時刻が14時頃。急性心筋梗塞でほとんど苦しまず、発見も早かったから綺麗な状態でここにいる。本当にうらやましい逝き方だったよ」と声掛けしていたのが印象に残る。遺体発見は、25日にホームヘルパーが訪問するはずであったが留守で入れなかった。その後、何度か電話をしたが繋がらなかったという。警察の方も現地で聞

き込み調査をしたところ、26日のAM9時過ぎに自宅近辺を杖つきながら歩いているYさんを目撃したという情報を得たという。ホームヘルパーの機転により警察への通報後、遺体を発見したという。独り暮らし世帯での死亡発見が多いのは以前から言われているが、死亡推定時刻から想像するに、息を引き取って2時間後の発見は、本当に早い対応だったと思う。

28日15時出棺、枚方市斎場やすらぎの郷へ。Fさんの奥様の親戚の方が千葉から移動しているため、15時30分JR藤阪駅で合流後、斎場に案内する。家族で茶毘に付す。

Fさん夫妻はともに80歳を超え、特に奥様の方は重篤な疾病で入院治療中、Fさんも帰郷先の山口で救急搬送されての悲報を受け、物申さぬご子息と対面した。僅か9歳で脳腫瘍に罹患し、ご苦勞も多かったと思う。ご息女のMさんは、23日以降Fさんの救急入院や付き添い・車での移動・転院手続き等々数日間まともに寝ていない状態であった。Fさんの親族は山口、奥様の親族は東京や千葉と近くに親族がいなかった。親しく付き合っていた知人友人はいただろうが、高齢で頼みづらかったのであろう。今回このような形でFさんの依頼を受け、ご子息のYさん葬送に関わらせていただいたことは、これまで社会福祉法人わらしべ会がFさんに賜った数々の支援に少しでも恩返しすることができた機会であったと思う。また、現在の我が国の社会構造上、このような対応も含めた社会福祉法人の地域貢献というものの範疇に入る事例だと思う。